氏　　名	小林　好信
学位の種類	博士（　ヒューマン・ケア科学　　）
学位記番号	博甲第　9582 号
学位授与年月	令和２年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	大学生アスリートにおけるスポーツ傷害の発生と回復に関連する心理的要因

主　　査	筑波大学教授	医学博士	水上　勝義
副　　査	筑波大学教授	医学博士	斎藤　環
副　　査	筑波大学准教授	医学博士	柳　　久子
副　　査	筑波大学准教授	博士（医学）	太田　深秀

論文の内容の要旨

小林好信氏の博士学位論文は、大学生アスリートにおけるスポーツ傷害の発生と回復に関連する心理的要因を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者はまず先行研究を概観し、スポーツ傷害の発生と心理的要因の関連については、1960 年代後半以降多くの研究が進められてきたこと、しばしば引用されるストレス―スポーツ傷害モデルにおいて、傷害発生はストレス反応との関連が最も強く、その影響要因として個人特性や対処資源の重要性が指摘されていることなどを述べている。しかしながら、大学生アスリートの傷害に関して、競技種目や傷害の重症度による関連要因の違いについては十分検討されていないことを指摘している。また傷害の回復や競技復帰は、受傷後の否定的な心理的反応や治療のアドヒアランスによる影響が大きいことが報告されているが、その他の要因についての検討は十分行われていないことを指摘している。そこで本研究の目的を、個人特性のレジリエンスや健康に関連要因を新たに加え、競技種目別、重症度別に傷害発生や傷害の回復に関連する心理要因を包括的に検討することとしている。

（対象と方法）

本論文は３つの研究から構成される。研究１では、男女大学柔道選手 793 人を調査対象に、スポーツ傷害の状況や競技成績、個人特性、対処資源、健康に関する事項、ストレス反応に関するアンケート調査を１年間の間隔をおき２時点で行った。初回調査時に傷害のない柔道選手 222 人を分析対象として、1 年後の受傷の有無を目的変数、標準化した初回調査の心理的要因を説明変数として、性、年齢、競技成績、過去の傷害の罹患期間にて調整した二項ロジスティック回帰分析を行った。研究２では、陸上競技選手 655 人を調査対象に加えた。初回調査時に傷害のない陸上競技選手 191 人を分析対象とし、研究１と同様の方法で分析し、その後柔道選手と陸上競技選手の結果を比較検討している。

研究３では、初回調査時に受傷していた柔道選手100人と陸上競技選手82人を分析対象として、従属変数に回復の状況を、説明変数に標準化した初回調査の心理的要因の結果を投入し多項ロジスティック回帰分析を行っている。

（結果と考察）

研究１では、１年後調査における柔道選手の傷害発生は、222 人中 60 人（27%）であり、非受傷群と比した調整後オッズ比[95%信頼区間]は、獲得的レジリエンスが 1.71[1.07-2.72]であり、傷害の発生と関連することを示した。

研究２では、1年後の調査で軽症と重症の傷害発生は、柔道選手が222人中40人(18%)と20人(9%)、陸上競技選手 191 中 14 人(7%)と 18 人(9%)であった。非受傷群と比した調整後オッズ比は、柔道の軽症群にて本来感.49[0.27-.90]、重症群にて獲得的レジリエンス 2.26[1.03-4.98]、問題解決型行動特性 2.86[1.30-6.27]、メンタルヘルス不良 3.26[1.41-7.54]であった。同じく、陸上競技の軽症群にて健康管理の自信感.320[0.13-0.77]、重症群にて資質的レジリエンス.36[0.14-0.91]、獲得的レジリエンス 2.60[1.08-6.25]であった。両競技とも獲得的レジリエンスが重症傷害の発生と関連すること、柔道では、問題解決型行動特性とメンタルヘルス不良が重症傷害のリスクを高め、陸上競技では資質的レジリエンスがリスクを低下することを示した。著者は、高い獲得的レジリエンスの競技者はコンディション不良に耐えながら競技を続けることで重症の傷害につながる可能性を推察している。

研究３では、１年後の調査で傷害の遷延と再受傷に該当するものが、柔道が 100 人中 26 人(26%)と 20 人(20%)、陸上競技が 82 人中 9 人(10%)と 24 人(26%)であった。回復群と比した調整後オッズ比は、柔道の遷延群にてメンタルヘルス不良 3.17[1.14-8.85]、再受傷群にて対人依存型行動特性 3.18[1.15-8.81]、メンタルヘルス不良 3.50[1.22-10.03]、ストレス反応.23[.07-.81]であった。陸上競技の遷延群にて有意な変数はみられず、再受傷群にて対人依存型行動特性.45[.21-.96]であった。これらの結果から、競技復帰を支援するためには、競技種目の違いを考慮した支援が必要であること、柔道では、メンタルヘルスへの支援が重要なことを報告している。

（結論）

著者は、傷害の発生要因は競技種目や重症度により異なるが柔道と陸上とも獲得的レジリエンスが重症傷害の発生リスクを高めること、遷延や再受傷に関わる要因も競技種目により異なるため復帰にむけて競技種目を考慮した支援が必要であること、柔道ではとくにメンタルヘルスに対する支援が重要なことを結論としている。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究はこれまで十分検討されていなかった、大学生アスリートのスポーツ外傷の関連要因や、外傷の再発や遷延に関する要因を示した。とくに競技種目や外傷の重症度により要因が異なることを明らかにしたことは、大学生アスリートのスポーツ外傷の予防や回復支援に際して貴重な示唆を示したと言える。本研究の成果は、学術的に優れているのみならず、大学生アスリートの支援においても重要な研究と評価される。

令和２年１月８日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。